

死者はどこへ

—ヘブライ語聖書における死者の居所の諸相とその変遷— (上)¹

小林 洋一

序

古代から多くの人にとって人の運命は死をもって終わりではなかった。それでは、人は死んだらどうなるのか。そして死んだらどこへ行くのか。一般的にキリスト教会では、死者の居所として「天」がイメージされることが多い。しかし、このイメージは、キリスト教会の正典である聖書の前半部分のヘブライ語聖書を規範にする限り、例外的に言えても²、いわゆる「聖書的」とは言えない。それでは、ヘブライ語聖書では、一般的に死者の居所はどのように考えられていたのであろうか。

本稿は、ヘブライ語聖書における死者の居所の諸相とその変遷を聖書積義的・宗教史的に考察することを目的としている。その構成は大きく2部に分

1 本稿は2008年12月5日、西南学院大学学術研究所内で開催された「生命倫理の学際的研究会」での報告を基に加筆修正したものである。さらに言えば、本稿は、2001年5月15日、ドージャー記念館講堂を会場に行われた寺園喜基氏の西南学院創立85周年記念学術講演に些かの刺激を受けていることも付言しておきたい。寺園氏は、「秘義としての死」という講演の中で、オウム真理教の麻原は、人は死んだらどうなるのか、何処へいくのか、という若い求道者たちの問いに対して、カリスマ的威厳をもって、「死と再生」、輪廻転生を教え、殺人の合理化や死の美化を行っていたことに触れ、不滅の魂と滅び行く身体という二元論の人間理解を問題にされた(講演草稿参照)。

2 例えば、預言者エリヤは、その死に際して昇天している(列下2:11)。エノクの場合には「神が取られた」(創5:24)とあり、昇天したとは書かれていないが、事情はエリヤと同じと理解してよいであろう。

かれている。前半部ではヘブライ語聖書における死者の居所としてのシェオール（陰府）が考察の対象とされる。そして後半部では、死者の居所がヘブライ語聖書の神、ヤハウェ信仰とどのように折り合うことになったかが考察される。

I 死者の居所としてのシェオール（陰府）

ヘブライ語聖書では、死者の居所は、一般的に שְׂאוֹל, שָׂאֵל（「シェオール」）即ち「陰府」³ と呼ばれ、ヘブライ語表記のごとく長書き、省略形の両者が見られ、合わせて65回出てくる⁴。

שְׂאוֹל, שָׂאֵל は、語源的には、שָׂאֵל（「シャーアル」）（尋ねる—口寄せによって）、שְׂעַל（「シヨアル」）（うつろな手、洞窟）、שָׂאָה（「シャアー」）（荒涼としている）等が指摘されたりするが確かなことは分かっていない⁵。冠詞つきでは出て来ないので、元来は固有名詞であった可能性が指摘されている⁶。

1. シェオール（陰府）の同義語

死者の居所としてのシェオールに関してヘブライ語聖書では様々な同義語が出て来る。それらを列記すれば以下のようなになる。

3 『聖書』（以下「口語訳」）では、旧約聖書が「陰府」、新約聖書が「黄泉」と異なる漢字が使われていたが、『聖書 新共同訳』（以下「新共同訳」）では、旧約、新約ともに「陰府」が統一的に使用されている。

4 イザ7:11に出て来る שְׂאוֹלָה（「願い」）を、母音を変えて「シェオールへ」と読み替えるとシェオールの頻度は66回となる。Cf. T. J. Lewis, “Dead, Abode of the,” in *The Anchor Bible Dictionary II* (New York: Doubleday, 1999), 101-105. 口語訳、新共同訳は、共に読み替えを採用している。

5 Cf. H・リングレン（荒井章三訳）『イスラエル宗教史』（教文館、1976）、278. Francis Brown, S. R. Driver and C. A. Briggs, *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament with an Appendix Containing the Biblical Aramaic* (Oxford: Clarendon Press, no date), 980（以下このオックスフォードのヘブライ語辞典をBDBで表記する）。

6 Cf. Lewis, “Dead, Abode of the,” 101-105.

① 大地, 地

だが、もし主が新しいことを創始されて、大地⁷ (אֶרֶץ) が口を開き、彼らと彼らに属するものすべてを呑み込み、彼らが生きてまま陰府に落ちるならば、この者たちが主をないがしろにしたことをあなたたちは知るであろう。」(民16:30)⁸

王は言った。「恐れることはない。それより、何を見たのだ。」女はサウルに言った。「神のような者が地 (אֶרֶץ) から上って来るのが見えます。」(サム上28:13, cf. 出15:12, ホセ2:2)⁹

上記章句において、冠詞付きの「アダマー」(「大地」)及び「エレッツ」(「地」)が、シェオールと同義語になっていることは明らかである¹⁰。語義的には、アダマーは、耕作可能な土地として、エレッツと区別されるが、シェオールを指す点において、両者に区別は認められない。

7 下線は筆者 (以下同じ)。

8 本稿の聖書章句引用は、特に断らない限り新共同訳を用いている。

9 「ユダの人々とイスラエルの人々は ひとつに集められ 一人の頭を立てて、その地から上って来る (וְעָלוּ מִן־הָאָרֶץ)。イズレエルの日は栄光に満たされる。」(ホセ2:2)における「その地から上って来る」の用法が、サム上28:13と酷似しているので、この「地」はシェオールを意味する可能性がある。Cf. F. I. Andersen and D. N. Freedman, *Hosea: A New Translation with Introduction and Commentary* (The Anchor Bible 24; New York: Doubleday, 1980), 209.

10 Lewis, “Dead, Abode of the,” 101-105 によれば、「地」はウガリット語、アッカド語において、地下の冥界を意味する。

② 墓穴

あなたはわたしの魂（נַפְשִׁי）¹¹を陰府に渡すことなく あなたの慈しみに生きる者に墓穴（קְבֻרָה）を見させず（詩16：10）

「墓穴」と訳されている「シャハト」が、その並行法的用法からシェオールの同義語となっていることは明らかである¹²。

③ 穴

わたしの魂は苦難を味わい尽くし 命は陰府にのぞんでいます。（詩88：4）

穴（בֹּרַי）に下る者のうちに数えられ 力を失った者とされ（詩編88：5，cf. イザ14：15）

汚れた者と見なされ 死人のうちに放たれて 墓（קְבֻרָה）に横たわる者となりました。 あなたはこのような者に心を留められません。 彼らは御手から切り離されています。（詩88：6）

11 シェオールに渡されるべき「魂」と訳されている נַפְשִׁי（「ネフェシュ」）は、「いのち」と同義語であろう。この「魂」が、注1で言及した寺園氏の「不滅の魂と滅び行く身体」というときの二元論的構造における「不滅の靈魂」ではないことは確かである。Cf. ヴェルナー・H. シュミット（山我哲雄訳）『歴史における旧約聖書の信仰』（新地書房，1985），540. H. W. ヴォルフ『旧約聖書の人間論』（日本基督教団出版局，1983），52-53. 尚、ネフェシュの「いのち」，「魂」，「のど」，「くび」等を含む多義の意味については，ヴォルフ『旧約聖書の人間論』，33-66参照。O. カイザー・E. ローゼ（吉田泰・鶴殿博喜訳）『死と生』（ヨルダン社，1981），52は、「死者の魂」を実体のない「影のようにつかみどころのないもの，つまり今日の観念に従えば，言わば生きている人間の非物質的分身」と興味深い説明を試みている。

12 シャハトの本来の意味は「墓」ではなく、「穴」，「立坑」である。H. クルーゼ「天地創造」『新聖書大事典』（キリスト新聞社，1984），969によれば，このシャハト（立坑）はシェオールへの道とも考えられていた。

あなたは地の底の穴に (בְּבוֹר תַּחְתִּיּוֹת) わたしを置かれます 影に閉ざされた所 (בְּמִצְלֹת) , 暗闇の地 (בְּמִחְשְׁכִים) に。(詩88:7)

詩編88編では、ボール(「穴」)がシェオールの同義語となっている。6節のケベル(「墓」)がシェオールとどのような関係にあるのか、この節だけでは明らかではない。

新共同訳が7節の「影に閉ざされた所」と訳している「メツォロート」は「深淵、深み」を意味する言葉であり、「暗闇の地」と訳されているヘブライ語「マハシャキーム」は「闇(複数)」とでも訳せる言葉である¹³。「メツォロート」にせよ、「マハシャキーム」にせよ、ボール(「穴」)と共に、シェオールの表象にとって重要な言葉となっている。

④ 地の下, 下の地

わたしの命を奪おうとする者は必ず滅ぼされ 陰府の深みに (בְּתַתְּיֹת הָאָרֶץ) 追いやられますように。(詩63:10)

新共同訳が「陰府の深み」と訳している「タフティヨート ハ・アーレツ」は、直訳すれば、「地の(最)底辺」となる。「滅び」(שׁוֹאָה) (「シヨア」)との関連で語られているので、この「地の(最)底辺」は、新共同訳が理解しているようにシェオールと考えてよいであろう。

もはや、水のほとりの木もすべて丈を高くしえず、梢を雲の間に伸ばしえず、水に潤う木も、高ぶってそびえ立つことはできない。彼らはすべて死に渡され、穴(בּוֹר)に下る人の子らと共に地の深き所(אֶרֶץ תַּחְתִּיּוֹת)へ行く。(エゼ31:14)

新共同訳が「地の深き所」と訳している語は、「エレツ タフティート」である。直訳すれば、「(最)底辺の地」となる。この表現は、詩編63編10節

¹³ Cf. BDB, 365, 846. ヘブライ語本文には、それぞれ「所」「地」という言葉はない。

の「タフティヨート ハ・アーレツ」が逆転したようなかたちである。尚、この章句では、ボール(「穴」)と「エレツ タフティート」が並行になっている。両語とも、死との関連で語られているのでシェオールを指すことは明らかである。

⑤ 滅び

陰府も神の前ではあらわであり 滅びの国 (אֶרֶץ אַבְדֹן)¹⁴も覆われてはいない。(ヨブ26：6，cf. ヨブ28：22，31：12，箴15：11，27：20)

「滅びの国」の「滅び」は陰府と同義語であるが、ヨブ記28章22節によれば、死の同義語でもある。

以上、ヘブライ語聖書では、シェオールは、様々な同義語をもって表現されていることが分かる。これらの同義語は、元来古代中近東の陰府(冥界)の宇宙的・神話論における神々とも関係していたのかも知れないが、ヘブライ語聖書では、その神的意味は失われている。

上記のシェオールの同義語の探求でもすでに明らかになりつつあることであるが(例えば、詩63：10の「タフティヨート ハ・アーレツ」(「地の(最)底辺」))、ヘブライ語聖書におけるシェオールの位置、所在についてさらに詳しく見ていくことにする。

14 ヘブライ語本文には「滅び」という言葉だけで、「国」という言葉はない。しかし、「アバドン」がシェオールの同義語であることを考えれば許される訳である。アバドンの人格化については、ヨブ28：22参照。また底なしの淵の滅びの使い、アバドンについては、黙9：11参照。

2. シェオールの位置, 所在 (トポグラフィー)

シェオール及びその同義語に関連して「下る」(יָרַד)という表現は出てくるが(サム上2:6, イザ14:11, 詩55:16等), 「上る」という表現は出て来ない¹⁵。従って, ヘブライ語聖書では, シェオールは, 天でも, 地上でもなく, それは地下に存在する, と考えられていた。それでは, それは地下のどのような所か。

① 地下の水の中

あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり, 下は地にあり, また地の下の水の中にある (וְאֲשֶׁר בְּמַיִם מִתַּחַת לְאָרֶץ), いかなるものの形も造ってはならない。(出20:4)

十戒の偶像製作禁令の拡張部分である出エジプト記20章4節の三層の世界観における「地の下の水の中にある」は, シェオールを指していると考えてよいであろう。即ち, シェオールは地下の水の中にあると考えられていた, ということである¹⁶。それはヨブ記でも明らかである。

亡者たち, 陰府の淵に住む者たち (שְׁכֵנֵיהֶם) は 水の底 (מִתַּחַת מַיִם) でのたうち回る。(ヨブ26:5)

「陰府の淵に住む者たち」は, 原文では「ショーヘネーヘム」(「彼らの住む者たち」)で, 3人称複数の人称代名詞の「彼ら」は, 「水」を指すと考えられる。従って死者とは「水(淵)の住民」である¹⁷。

15 コヘレト3:21に, 人が死んでから霊(רוּחַ)が天に行くという考えがあったことが示唆されている。コレレトは, これを批判していると考えられるが, この霊が天に行くという考えは, 人の魂が永遠に生きる(不死)という考えと関係していたのかも知れない。Cf. C. L. Seow, *Ecclesiastes: A New Translation with Introduction and Commentary* (The Anchor Bible 18c; New York: Doubleday, 1997), 175-176.

16 Cf. ヨナ2:3以下, 詩18:5以下。

17 新共同訳の「陰府」という言葉はヘブライ語本文にはない。尚, 陰府に行くには渡らなければならない陰府の川も考えられていた (cf. ヨブ33:18)。

② 地下の最下層

申命記によれば、シェオールは地下の最下層にあることが暗示されている。

わが怒りの火は燃え上がり 陰府の底にまで (עַד-שְׂאוֹל תַּתְּחִית) 及び地とその実りをなめ尽くし 山々の基を焼き払う。(申32：22)

申命記では、シェオールが、神の怒りの火が到達可能な地下の最下層として言及されている。シェオールはしばしば最高層の天との対比で言及される。

高い天に対して何ができる。 深い陰府について何が分かる。(ヨブ11：8, cf. アモ9：2, 詩139：8)

③ 墓と同義語？

墓の中 (בְּקִבְרִי) であなたの慈しみが 滅びの国で (בְּאַבְדִּיּוֹן) あなたのまことが 語られたりするのでしょうか。(詩88：12)

シェオールが墓と同義語として使われ、上記詩編88編12節のように、墓と明確な空間的区別のない表現も出て来てややこしい。墓とシェオールはどこかで不可分に繋がっているとイメージされていたことは確かだと思われる¹⁸。とにかく、ヘブライ語聖書では、実体をもつ墓と神話的・宇宙論的・観念的世界観から来るシェオールのような相違する表象が、繋がっているものとして併置されて出て来る。詩編88編12節もそのような例の一つと考えたい¹⁹。

さて、このシェオールのトポグラフィーは、聖書の民、イスラエルの独特のものではない。小川英雄氏によれば、古代オリエント世界の死後の世界と

18 カイザー・ローゼ『死と生』, 48 によれば、死者の霊と墓は特別に結合していると考えられており、人々はその霊を呼び出すために夜間に洞窟墓地に行った。なぜなら霊は夜明け前に彼らの闇の国に戻らなければならぬ、と考えていたからである (cf. 創 32：25-27, サム上 28：25, イザ 65：4)。

19 Cf. エゼ 32：17-32.

して以下の三つが考えられていた。

1. 未来に向けての地上での存続（輪廻転生）
2. 地下の冥界への下降
3. 天界（太陽や月）への上昇²⁰

上記で見て来たように、ヘブライ語聖書におけるシェオールのトポグラフィは、上記分類の2の「地下の冥界」と同じものと言える。その意味で、ヘブライ語聖書の死者の居所の形象及び観念は、カナンの、ひいてはメソポタミア地方のその影響下にあってと見て良いであろう。即ち、ヘブライ語聖書におけるイスラエルは、当時の古代中近東世界のシェオールの形象及び観念を借用し、その大部分を周りの諸民族と共有していたということである。但し、エジプトの『死者の書』やバビロンの『ギルガメシュ叙事詩』²¹等の冥界の詳細な描写と比較すると、ヘブライ語聖書のシェオールの描写は、驚くほど貧弱である。これもまた見逃すことのできない事実である²²。

3. シェオールとはどのようなところか

H・リングレンによれば、ヘブライ語聖書において、シェオールは、先祖が行った安息の地であると同時に恐ろしい、忌むべき地というアンビバレントな思いが交差しているところであった²³。

以下に見るように、シェオールがどのようなところかについてもヘブライ語聖書には様々な描写が見られる。特に、そのイメージ描写の特徴として挙

20 小川英雄『古代オリエントの宗教』（エルサレム宗教文化研究所、1985）、24。Cf. カイザー・ローゼ『死と生』、62-63。

21 Cf. 月本昭男訳『ギルガメシュ叙事詩』（岩波書店、1996）、91-92、158-170。

22 各研究者による古代中近東の宇宙観あるいはその影響下にあってヘブライ語聖書の宇宙観図は、それぞれ興味深いものであるが、詳細においては不統一が目立つ。フランシスコ会聖書研究所『聖書 原文校訂による口語訳 創世記』（サンパウロ、1992）、289。D. Michel+柴田有「せかいぞう 世界像 Weltbild」『旧約新約聖書大事典』（教文館、1989）。N. G. Gottwald, *The Hebrew Bible-A Socio-literary Introduction* (Philadelphia: Fortress Press, 1985), 476。H. クルーゼ「天地創造」『新聖書大事典』、970。M. ジョーンズ編（左近義慈監修佐藤陽二訳）『図説旧約聖書の歴史と文化』（新教出版社、1973）、26等参照。

23 リングレン『イスラエル宗教史』、278。

げられる主なものは、闇、沈黙（無音）、塵である²⁴。

① 闇

二度と帰って来られない暗黒の死の闇の国（אֶרֶץ חֹשֶׁךְ וְצִלְמוֹת）にわたしが行ってしまふ前に。（ヨブ10：21，cf. 詩143：3，ヨブ38：17）

その国の暗さ（עִיִּפְתָּה）は全くの闇（אֶפֶל）で 死の闇（צִלְמוֹת）に閉ざされ、秩序はなく（לֹא סִדְרִים） 闇（אֶפֶל）がその光となるほどなのだ。」（ヨブ10：22）

シェオールの「闇」のイメージは重要な特色の一つである。即ち、シェオールには光がなく、そこは光の届かないところである。それ故に「いのち」もないところである。ヨブ記10章22節において、シェオールが「秩序」のないところとなっているのも興味深い。創世記1章の天地創造において、神は、闇の中に光を創造することで、まさに「いのち」と「秩序」をもたらしただけである。

② 沈黙（無音）

主を賛美するのは死者ではない 沈黙の国（דוֹמָה）²⁵へ去った人々ではない。（詩115：17，cf. ヨブ3：13，詩94：17）

③ 塵がある

それはことごとく陰府に落ちた。すべては塵（עָפָר）の上に横たわっている。（ヨブ17：16，cf. 詩7：6，ヨブ21：26）²⁶

24 Cf. Lewis, "Dead, Abode of the," 101-106.

25 ヘブライ語本文には「沈黙」だけで「国」という語はない。

26 『ギルガメシュ叙事詩』が語る冥界では、塵と粘土がそこに住む者の食物となっている。月本昭男訳『ギルガメシュ叙事詩』，92。

④ 門がある

わたしは思った。 人生の半ばにあつて行かねばならないのか 陰府の門に残る齡をゆだねるのか、と。(イザ38:10)

冥界の門と門番は、エジプトとメソポタミヤの冥界ではよく知られた存在であるが、ヘブライ語聖書では、シェオールあるいは死の門のみが言及されている²⁷。シェオールの門は、シェオールの逃れられない牢獄的イメージと関係しているのであろう²⁸。

⑤ 全ての生きものが集まる場所

わたしは知っている。 あなたはわたしを死の国 (מְוֵת)²⁹へ すべて命あるものがやがて集められる家 (בֵּית מוֹעֵד לְכָל־חַי) へ 連れ戻そうとなさっているのだ。(ヨブ30:23, cf. 詩89:49)

ヨブ記は、シェオールをすべての命あるものが集められる「家」としてイメージしている。コヘレトの言葉にも同じようなイメージが見られる。そこでは特に動物(ペット)も同じ場所におり、死んだものが皆一緒にいるという「総合的な他界観」³⁰が見られる。

人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。 同じ霊をもっているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。すべては空しく、(コヘ3:19)

27 「陰府の門(複数形)」が出て来るのは、イザ38:10のみで、他は「死の門(複数形)」である(詩9:14, 107:18, ヨブ38:17)。

28 Cf. Lewis, "Dead, Abode of the," 101-106.

29 ヘブライ語本文には「死」という言葉だけで、「国」という言葉はない。しかし、マヴェト(「死」)はシェオールの同義語となっているので、新共同訳は不適切というわけではない。

30 脇本平也『死の比較宗教学』現代の宗教3(岩波書店, 1997), 71.

すべてはひとつのところにいく。 すべては塵から成った。 すべては塵に返る。(コヘ3:20)

この「全ての生きものが集まる場所」との関連で、注意しなければならないものに「先祖たちのもとに集められる」というものがある。これは、家族の死霊が何らかの仕方と一緒に生活していることを暗示しているように見える。家族墓地からの想起と考えられる³¹。

その世代が皆絶えて先祖のもとに集められると、その後、主を知らず、主がイスラエルに行われた御業も知らない別の世代が興った。(士2:10)³²

家族の墓で(サム下19:38)「先祖のもとに集められる」(士2:10)ことや「先祖たちと共に眠りにつ(く)」(創47:30)のを望んだのは、家族の墓に葬られた者は、影として「陰府でも彼らの先祖に囲まれて安らいている」と考えられたからであろう³³。

⑥ 忘却の地

闇の中で驚くべき御業が 忘却の地 (אֶרֶץ נִשְׁכַּח) で恵みの御業が 告げ知らされたりするのでしょうか。(詩88:13)

31 Cf. リングレン『イスラエル宗教史』, 278.

32 一般的には、士2:10の「先祖のもとに集められる」は、単なる死後の人生の表現と捉えられている。Cf. Robert G. Boling, *Judges: A New Translation with Introduction and Commentary* (The Anchor Bible; New York: Doubleday, 1975), 72 (cf. 創25:8, 17, 35:29, 49:29, 33, 民20:24, 27:13, 31:2, 申32:50). 但し、並木浩一氏は、士2:10を、「特定の集合場所を念頭に置いたものではなく、契約において各世代がひとつの民に属していたことの表現」と理解すべきである、と興味深い解説をしている。並木浩一『ヘブライズムの人間感覚—〈個〉と〈共同性〉の弁証法—』(新教出版社, 1997), 118.

33 カイザー・ローゼ『死と生』, 70. Cf. S. Schulz+月本昭男・山我哲雄「よみ 陰府, 黄泉 Totenreich, Unterwelt」『旧約新約聖書大事典』, 1261. シェオールが安らぎの地であることについては、ヨブ3:11-19も参照。

死者が遅かれ早かれ子孫の記憶からも消えてしまう、というところから来る表象であろう。

⑦ 蛆や虫がいる³⁴

お前の高ぶりは、琴の響きと共に 陰府に落ちた。 蛆がお前の下に寢床となり 虫³⁵がお前を覆う。(イザ14：11, cf. ヨブ17：14)

墓に埋められた死体にわく「蛆」や「虫」が想定されているので、このイメージは墓との結びつきが濃厚である。ただ、陰府の中でも蛆や虫がいるところは、氏族が共に安らいでいるところからは離れたところを示唆していると思われる³⁶。

⑧ 満杯になることがない

蛭の娘はふたり。 その名は「与えよ」と「与えよ。」 飽くことを知らぬものは三つ。 十分だと言わぬものは四つ。(箴30：15)

陰府、不妊の胎、水に飽いたことのない土地 決して十分だと言わない火。(箴30：16, cf. イザ5：14, ハバク2：5, 箴言27：20)

シェオールが静的なものではなく、死者を飲み込むダイナミックな力あるものとしてイメージされている。T. J. ルイス (Lewis) は、シェオールの飽くなき食欲にカナンの神モートの食欲との類似性を見ている³⁷。

34 マルコ9：48によれば、「地獄」には火と共に蛆がいる。しかし、ヘブライ語聖書において、シェオールはいわゆる「地獄」ではない。

35 口語訳は、この「虫」を「みみず」と訳出している。

36 Cf. カイザー・ローゼ『死と生』, 74-75.

37 Lewis, "Dead, Abode of the," 101-106.

⑨ 仕事，企て，知恵，知識がない

何によらず手をつけたことは熱心にするがよい。いつかは行かなければならないあの陰府には 仕事も企ても，知恵も知識も，もうないのだ。(コへ9：10)³⁸

⑩ 戻って来られない

密雲も薄れ，やがて消え去る。 そのように，人も陰府に下れば もう，上ってくることはない。(ヨブ7：9，cf.サム下12：23)³⁹

⑪ 神との交わりがない

死の国⁴⁰へ行けば，だれもあなたの名を唱えず 陰府に入れば だれもあなたに感謝をささげません。(詩6：6，cf.イザ38：18，19，詩88：11，12，13，115：17)

ここから分かることは，ヘブライ語聖書において，生きることは，神との関係に生きることであり，死とはその関係喪失を意味する⁴¹。神との交わり

38 ヨブ14：21によれば，死んだ父は，その子たちの境遇について知ることはない。従って，シェオール³⁸の死者がこの世の生者を見守っているという考えはないことになる。

39 しかし，その同じヨブ記に次のような表現も見られる。「どうか，わたしを陰府に隠してください。あなたの怒りがやむときまで わたしを覆い隠してください。しかし，時を定めてください。 わたしを思い起こす時を。」(ヨブ14：13)。シュミットが指摘するように，これは驚くべき逆説である。ヨブは神の怒りが届かない(支配領域外の)シェオールに神が自分を連れて行って神の怒りが止むときまで隠して欲しいと言っているからである。即ち，「本来なら神が救い得ない場所で，救いのために介入するように期待」しているからである。シュミット『歴史における旧約聖書の信仰』，546。

40 ヘブライ語本文には「死の国」の「国」という言葉はなく，マヴェト(「死」)に冠詞がついているだけである。

41 Cf. ヴォルフ『旧約聖書の人間論』，218。

のないこと、それはシェオールにいるのと同じこととなる。

4. シェオールにおける死者の状態

ヘブライ語聖書において、シェオールにおける死者の状態についてまとまった言説はない。あるのは詩的表象を含むいくつかの断片的言及にすぎない。従って、シェオールのイメージ同様、その形象は公式化されていると言えるものは何もない⁴²。

① 亡霊，死霊として存在する

あなたが死者に対して驚くべき御業をなさったり 死霊 (רְפָאִים) が起き上がって あなたに 感謝したりすることがあるでしょうか。(詩88：11)

地下では、陰府が騒ぎを起こす お前が来るのを迎えて。そして、亡霊たち (רְפָאִים) を呼び覚ます 地上では、すべてつわものであった者らを。また、その王座から立ち上がらせる 諸国の王であった者らを皆。(イザ14：9)

彼らはこぞってお前を迎え、そして言う。「お前も我々のように無力にされた。お前も我々と同じようになった。」(イザ14：10)

シェオールにある「死んだ者」は、רְפָאִים (「レファイーム」)、即ち、死者の霊(死霊，亡霊)と呼ばれている。「レファイーム」は、「ラファー」(弱い)、「ラファー」(救う)と関係しているかも知れない⁴³、レファイームは、シェオールにおける死者の存在形態の表象である。生きている存在が、死に

42 Cf. リングレン『イスラエル宗教史』, 278.

43 Cf. リングレン『イスラエル宗教史』, 281. イザ14：9では、レファイームが王や勇者との関連で出て来る。レファイームが「巨人」だったことをも考え合わせると(申2：11, 20-21)、かつては、王や勇者の死霊がレファイームと呼ばれていた可能性がある。Cf. M. S. Smith, "Rephaim," in *The Anchor Bible Dictionary* V (New York: Doubleday, 1999), 674-676.

よってもはや生きていない存在となる⁴⁴。レファイームは、実体がないわけではなく、詩的表象とは言え、いわば弱くされた生者（イザ14：10）であり、「語り」（イザ29：4⁴⁵）、「のたうち回る」（ヨブ26：5⁴⁶）存在である（cf. ヨナ2：3）。それはまた「生ける者の影のような分身、その魂」とも言える⁴⁷。O. カイザー・E. ローゼは、エレミヤ書31章15節が語る北王国の彼女の息子たちの死に際してのラマで聞こえるラケルの（墓場での）泣き声は、単なる詩的技巧ではなく、死者が生ける者の影のような分身であるとの民間信仰が背後にあると見ている⁴⁸。

レファイームは、口寄せにより生者の世界と通話することが出来た（サム上28：1-19）⁴⁹。エン・ドルの口寄せによってシェオールから呼び出されたサムエルの「なぜわたしを呼び起こし、わたしを煩わすのか」（サム上28：15）から想像すると、サムエルのような死者は、そこで苦しんでいたわけではなく、平安に眠り続けていると考えられていたのであろう。彼と知れる上着を着ているのを見ると埋葬されたままの形でそこに居たと考えられている

44 Cf. 大林浩『死と永遠の生命—そのキリスト教的理解と歴史的背景—』（ヨルダン社、1994）、56。

45 これは口寄せを通してであろう。

46 次の26：6から推測すると、陰府の住民は無感情ではなく、神への恐れを感じて「のたうち回る」のである。

47 カイザー・ローゼ『死と生』、47。「新改訂標準訳」（NRSV）は、詩88：11のレファイームを“shades”（「影」）と訳出している。

48 カイザー・ローゼ『死と生』、47。

49 サム上28章の記事は、死者（サムエル）から期待できるものは何もなく、死者は生きている使者によって証言された以上のものを知らないことを示すためにあえてここに置かれたと考えられる。Cf. ルカ16：27以下。Cf. ヴォルフ『旧約聖書人間論』、214。古代では、死者が戻って来て生者に災いや恐怖をもたらす、という怖れと共に、死者の霊は生者に重要な情報や人には隠されている知識をもつ神的な存在とされていた。それ故に、古代イスラエルでは、死者の霊と交流する民間霊能者に接触することが禁じられ（申18：11）、死者の全領域は不浄とされた（レビ11：24、民19：11等）。これは、ヤハウェ以外の者（死者）が生者を支配することを許さないが故であったと理解される。Cf. G. フォン・ラート（荒井章三訳）『旧約聖書神学I—イスラエルの歴史伝承の神学』（日本基督教団出版局、1983）、362-363。歴下16：12に、アサ王が病気に際してヤハウェではなく医者に助けを求めたことが非難されているが、これは医者（**רִפְיָאִים**）ではなくレファイーム（**רִפְיָאִים**）であった可能性が高い。Cf. Smith, “Rephaim,” 674-676。

ようである。

② やがて消える？

わたしは思った。 命ある者の地において主を見ることもなくなり 消えゆく者の国 (תְּהִלָּה) に住む者に加えられ もう人を見ることもない, と。(イザ38:11)

「消える」ということが何を意味するのか、いわゆる「無」を意味するのは必ずしも明確ではない⁵⁰。

(以下次号)

50 カイザー・ローゼ『死と生』, 43-44によれば, コヘ9:5-6は死者の完全な無の認識を示しているという。Michael V. Fox, *Qohelet and His Contradictions* (Sheffield: Almond Press, 1989), 254, 258におけるコヘ9:5-6の解釈としての“non-existence 参照。”